HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	アイヌ語とエヴェンキ語の伝統的共有名詞について
著者	朝克，D．O．
引用	北海学園大学人文論集，20：81-110
発行日	2001-11-30

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

アイヌ語とエヴェンキ語の伝統的共有名詞について

D. O. 朝　克

エヴェンキ語はアルタイ諸言語に属するツングース語族の一つの重要な言語である。それは主としてロシアのシベリア地域とモンゴル国のバルグ地域と中国内モンゴル自治区のフロンボイル盟，黒龍江省の納河県，新疆ウイグル自治区の伊里地域などに住んでいるエヴェンキ族に使われている言語である。現に世界で約4万人がエヴェンキ語を使っているという。エヴェンキ語とアルタイ諸言語のモンゴル語族及びトルク語族との間には非常に深い歴史的な関係があり，それは言語学に関する語彙，音声，文法，形態などの諸方面から，ほとんど切っても切れない密接なつながりがある。一方，エヴェンキ語はアメリカとカナダのエスキモー語族及びインデアン語族，またフィンランドとノルウェー及びスウェーデンなどで使われているサーミ語，またモンゴル国のチャガタン語，朝鮮語・日本語・アイヌ語などとも，程度の差こそあれ，それぞれ共有関係があるといわれている。このさまざまな交錯した言語学的な現象に対して，研究者たちはそれぞれ自分の視点と立場及び方法論からアプローチしてきたが，その共有関係について主として以下のような三つの傾向があると言える。一つ目の傾向は，これらの諸言語との関係が，歴史的に考え，関係のない言語であり，それらには共通点があったとしても，単なる偶然的な現象である。次の傾向として，歴史上相互関係が発生しなかったものの，その諸言語がある歴史の過程においてお互いに接触し合い，相互に影響を受け，互いに借用されたりしてきたが，そういった言語現象は，諸言語において共有関係を持つようになったに過ぎない。三番目の傾向は，これらの諸言語が，相互に起源の時代から共有関係があり，それらが現在の諸言語においても保存され，それらの現象が起源時代の共有した言語的な遺産として残っている。

このような相違なる傾向は今まで，もちろん今後もお互いに議論していく必要がある。しかし人間の長い歴史の流れにおいて現れてきた複雑な諸現象に対して，いかなる結論を出そうとしても，恐らく時期尚早であろうと思わざるを得ない。

①なぜなら，現時点の言語学的な研究成果は，これらの問題を解決することにあたって，何よりも歴史的に捉えがたいということであり，根拠として用いられる第一次史料には，すでに多くの疑問が含まれている。例えば，『モンゴル秘史』はモンゴル語族研究において最初の基礎的なテクストとして古代モンゴル語の基準とされてきた。しかし，その本の書き手は一体モンゴル人なのか，どうかについていまだに多く疑問が残っており，したがって，もしモンゴル人であるならば，その書き手は一体モンゴル諸言語のどの部落言語あるいは方言を用いていたのであろうかというような疑問が発生するはずである。さらに，もしその書き手がモンゴル諸言語のいわゆる外部のダグール語（現代ダグール語には，古代モンゴル語の諸要素を最も多く保存してきたという）を用いていた人によって書かれたとしたら，そのモンゴル語と現代モンゴルとの根本的な相違は，どこにあるのであろうかといったような問題がある。また例えば，満州語における最初の第一次史料にも同じ問題が存在している。つまり『旧満州当案』の資料は，誰が満州語で記述したのであろうか，さらに満州語のどの方言を用いて記述したのであろうか，こういった一つの言語の基礎的な基準とされるテクストでさえ，いまだに確定されていないといえる。したがって，現在の研究者は，残念ながらそれらのテクストをほぼ疑いもなく鵜呑みにして，その歴史上の言葉を前提と基準とし，その言語における歴史的な変容・諸言語間の関係などの問題を説明して，論じてきたのである。言うまでもなく，それらの根拠は，すでに不確実で，疑問のあるものであるため，そこから導いてきた結論は歪みと誤解を免れることができないであろう。したがって，これらの言語に対して議論する余地は十分にあり，それらに対して大まかな結論を下すのに，機がまだ熟していないといえる。

②そのうえ，言語学において使用されている資料のほとんどは，文字記

録が出現した後の何十年ないし何百年，もしくは何千年前のものに過ぎない。しかし，人間の使われてきた言語は，文字記録が発生するまえ，はるか昔の事であり，その言語はすでに幾も歴史的な変遷のポロセスを経て，口から口へと伝承して，代々に継承してきたのである。その過程において，ある言語は長い時間の流れにおいて消えてなくなっており，またある言語が新たに誕生して来たのである[1]。たとえわれわれの日常において使っている言語であっても，その音声系統，語彙意味の構成，さらに文法のシステムさえ様々変容を経て発展して来たのが疑いの余地のない事実である。それゆえ，私たちはどうしても考えなければならないのは，この長い歴史の過程において現れた様々な言語の諸共有関係について，理論的な結論を下す場合，それはどの歴史的な時期と言語を根拠にしたのかということである。言い換えれば，言語の歴史をどこまで再現することができるのか，あるいはわれわれの現に用いてきた，限られた資料に基づいて，諸言語の歴史的共有関係をどこまで再現し，もしくは明確に解釈することができるのであろうか，といったような諸々の根本的な問題を考えなければならない。

③もし言語間の諸共有関係を研究するとすれば，言語学的な資料を批判的に慎重に扱うことはいうまでもなく，対象諸言語を使用し，あるいは使用している諸民族に関する遺伝学，考古学，歴史学，文化学，宗教学，地理学及び進化論的な各方面から考察し，それらの研究成果を参考しなければならないであろう。例えば，現時点において，北方圏及び北方圏周辺地域に居住してきた諸民族の起源などについての研究は多種多様であるが，そのなか，上記のような視野において考察した上で，満足のいく，信憑性の高い説や解釈はいまだに公表されていない。

周知の通りに科学研究の仕事として実際はすべてある問題を決して解決しようと一生懸命に頑張るっているわけではないでしょう。その上，それはそんなに高くてよじ登れるないとも思われない。科学研究の仕事の中に最も大事にこととしては，或いは存在している具体的事物の発生した条件と原因，発展した環境と規律及び過程，存在する価値と作用などを客観的て正確にいちいち説明し論証しなければならない事であろう。まだこれゆ

えに，人類はこの科学的説明と論証を基づいて，事物の発展規律を正確に把握する同時に事物の存在する価値を科学的利用し，自分を発展させるだろう。とはいえいろいろな学術問題は科学家，或いは専門家たちの各々研究を経て発表された観点と論証の内から次々と出でくるのです。もし，彼らの観点と論証が間違ったら，それは人類のある方面の発展及びひとびとのイデオロギーにも逆面の影響を起こす事があるのは当然です。別に科学研究の仕事は株式市場で株券を売り場するように騒ぎ立てることではなくて。その上，科学研究の仕事は人が目前の成功と利益を求めるのに急いであるとしている事でもないので。私達はとりあえず責任を持って，自分の研究の仕事を真面目にやらなけばならないのです。或る非常に複雑て歴史が十分長い学術問題を我々が一代学者たちははっきりした結論を出す事が出来ないかもしれないが，自分のやろうとしている研究の仕事を着実に進めるのは何よりも重要なことだと意識される。

二

さて，上記のような諸視点を念頭において，アイヌ語とアルタイ諸言語の関係を考え，その長い歴史的な諸過程を考えれば，それは実に非常に複雑かつ困難な言語的起源の問題である。つまり，アイヌ語とアルタイ諸言語との共有関係について，少なくとも私の考察したところによると，いわゆるそれら共有関係が3世紀，あるいは5－6世紀以来お互いに接触して残された借用成分だ，というような諸結論に達することは，現時点ではまだ早いだと思われる。というのも，人間の起源と歴史，そしてそれと共に用いられてきた言語はきわめて複雑で，それが地球のどこにも棲息するような特定の生物と同じく普遍性のあるものとしては決して考えられない。しかも，非常に残念なことに，われわれ自身の起源と歴史は，われわれの把握している歴史資料より遥かに長く，それにこの長い歴史の流れにおいて，人間は常に移動しており，その過程において発生の時点から移動せずに，一箇所に固定されて現在まで暮らしてきたとはとても考えられない。

したがって，長い歴史の過程において，どの民族も自分の発生時に使用されていた言葉が変化もなく延々と現在まで使われてきたことは，不可能なことである。つまり，われわれの謎に満ちた言語社会において，各民族がそれぞれの祖先がどのような言語を使っていたか，実際現在のわれわれは誰も自分の耳で聞いたことがなかったし，歴史記録さえ持ち合わせていないのである。したがってだれもそれについて確実なことは言えないに違いない。事実，現代人の認知しているのは，せいぜい上記のような文字によって記録された後の言語に過ぎない。

なかんずく，現在少人数によって記憶されているアイヌ語と，日々滅亡に瀕していくエヴェンキ語は，文字記録がなかった歴史があまりにも長く，いわゆるこの「生きている言語化石」には，それぞれの民族言語の問題があまりにも多く残っているのである。しかもこれら言語に関する記録と研究は，せいぜい百年前後の事である。

事実，この二つの言語の中に表れた共有関係は，明らかであり，それについての研究が始まったばかりである。現在この両言語の研究者，あるいはアルタイ諸言語の研究者は，それぞれの立場と視点から問題を設定して，資料収集に専念しているところであるが，しかし両言語における共有関係に関する資料収集は，もっと時間がかかるに違いない。

とはいうものの，限られた言語資料及び今までの研究成果を生かして，その山積している問題を解決するのは，決して容易いことではない。しかし方法と視点を広げ，新たな接近方法をもって模索することは不可能なことではない。実際，この両言語に内在する共有関係は非常に豊富で，とりわけその語彙の方面である。そして語彙の方面において最も複雑かつ両言語の共有関係においての意味論的には非常に豊かである。とくにその名詞，代名詞，動詞，形容詞は意味論において興味深い現象が見られる。したがって本論において，私は主としてエヴェンキ語とアイヌ語の一部の共有名詞を厳選し，言語学における語彙学，音声学，形態学，造語学などに基づき，両言語の共有名詞の共有関係をそれぞれその言語自身の文化ないし生活習慣及びその言葉の始原的な意味において比較して研究してみたい。

三

以下，エヴェンキ語とアイヌ語における共有関係のある最も基本的な名詞について例示しながら分析をする。

1．『ハモニカ』＊mukkuri。アイヌ語mukkuri，あるいはmukkuri～mukku，樺太方言mukkunとも言う；エヴェンキ語において主としてmukkuriというが，ドラル方言ではmukkurin，あるいはmukkurlinという。そのほかホイ方言でもmukkur，オルグヤ方言でmukkurlinとの言い方もある。もちろん，アイヌ語のmukkuriとエヴェンキ語のmukkuriの両言語におけるこの名詞において，音声構成が全く同じであるばかりか，その表した意味も一致している。最も注目すべきなのは，この両言語において指示して『モハニカ』は同じものであり，その言葉が指している楽器から発する音や，その果たす機能と遊び方もすべて同じである。ただし，アイヌ人のmukkuriはしばしば竹で作られ，エヴェンキの方はおおよそ白樺や柳の木で作られているのである。

2．『墓標』＊kuwar。アイヌ語kuwa；エヴェンキ語のドラル方言kuwar，ニェヘェ方言kuwara～kuwaran，メルゲル方言ku'ari～koori，ホイ方言koorin～koori。この中でアイヌ語のkuwaとエヴェンキ語kuwarの音声構成はほぼ一致しているが，アイヌ語kuwaの語尾に子音rが欠けているのが特徴となり，同時にそのゼロ形式の子音がエヴェンキ語語尾の子音rと対応しているのである。この両言語において，共有名詞の音声対応では，このようなアイヌ語語尾ゼル子音と，エヴェンキ語語尾の具体的子音間の対応が一定数量に有する。意味論上に解釈すると，エヴェンキ語のkuwarは単に『墓標』だけを標示していることではなく，『墓所』，『墓原』等の意味内包をも担っているのである。ところで，アイヌ語のkuwaは『墓標』以外『杖』をも示す事がある。

3．『まさかり』＊mukara。アイヌ語mukara；ジョン・バチラーはこれをmukaraと記録している[2]；エヴェンキ語オルグヤ方言mukar，ドラル方言mukar～mukal，バインチャガン方言mukal～muukal，イミン方

言 mukkar，ニェヘェ方言 mukar～mukkar。勿論，エヴェンキ語諸方言におけるさまざまな言い方の中で mukar は，アイヌ語の mukar と音声構成方面から全く同一である。語義方面で比較分析すると，アイヌ語の mukar は『まさかり』を表す以外，まだ『まさかりの形で作られた楽器』をも示すことがある。但し，エヴェンキ語における mukar はただ『まさかり』だけの意味を担うことになる。

4．『コツプ』＊ kontaro。アイヌ語 hontaro；エヴェンキ語のメルゲル方言で kontaro というのは普通であるが，または kondaro～hondag とも言う習慣がある。エヴェンキ語オルグヤ方言 kontor，ドラル方言 kondaor ホイ方言 hondaro～hondar，イミン方言 hondar～hondag。エヴェンキ語の中で kontaru という言い方は，アイヌ語の hontaro と音声構造形式非情に近づくのである。この共有名詞には，語頭子音 h と k だけが異同である音声間に対応を行って，ほかは皆相同的音声間に対応したことになる。実は，アルタイ諸言語において，語頭子音 k が h になって移り変わる形式が，音声変化カテゴリーでは一つの規則として認定されたのである。アルタイ諸言語の音声変化理論により，アイヌ語 hontaro の語頭に現れた子音 h も元来は k になった可能性があると仮定される。もしこの考えが正しかったならば，アイヌ語とエヴェンキ語の『コツプ』という意味を表す名詞の音声構造や語義構成はまぎれもなく一致していたことになる。しかも，この共有名詞は両言語の中で，示している『コップ』はすべて『松の木や柳の木で作られたコップ』に属するのである。

5．『箸』＊ sapka。アイヌ語 sahka；エヴェンキ語メルゲル方言 sapka～sabka～sahka，オルグヤ方言 sapka～sabka，イミン方言 sapka～sappa～sabha，ホイ方言 sapka～sappa。但し，エヴェンキ語ドラル方言やニェヘェ方言では sarpa とも発音される実例が見られる。エヴェンキ語諸方言の sapka～sabka～sahka～sappa～sabha～sappa 等それぞれ言い方と音声変化のシステムに基づいてみると，アイヌ語の sahka という名詞の発音は sapka から変化して来た可能性があると仮定される。語義方面からみると，sahka 及び sapka はまったく同じ道具を指示

しているが，エヴェンキ人の昔使っていた『箸』は，ほとんどすべて魚の骨や動物の骨で作られ，細くて短い箸であった。しかし，現在になるとsapkaは何の区別なしに，すべての箸をあわせて標示するようになってきたのである。

6．『鈴』＊konkon。アイヌ語konkon；エヴェンキ語ドラル方言konkon～konko，メルゲル方言konko～honko～honho，ホイ方言等konko～honko。言うまでもなく，アイヌ語のkonkonとエヴェンキ語におけるkonkonは，音声構造方面には完全に相同である対応を持っている。意味論の方面から言うと，konkonという共有名詞は両言語では全く同じ語義を示したのである。そのうえ，アイヌ語の専門家はkonkonという名詞が『kon kon……』という音を出す鈴の音に基づいて構成された擬声語だったと解釈しているが[3]，エヴェンキ語のkonkonという『鈴』を指す名詞の来歴も，アイヌ語とはほぼ同じだと考えられる。もし，この推論が正しかったならば，エヴェンキ語における『コン』という音や声を現す擬声語から派生された語は，『鈴』を除くほかにも幾つか出て来るのである。例えば，kon＋oron＞kon(n)oron（やる，する）『大きい声を出す』，kon＋siran（声〈のど〉を小さくして出す），＞konsiran『くどくどしゃべり続ける』，kon＋goron（遠い）＞kongoro＞kongo『声が聞けない』あるいは『つんぼである』などがある。つまり，アイヌ語とエヴェンキ語の両言語に現われたkonkon『鈴』という名詞は，音声構造形式及び語義構造内容などの方面で，すべて全く同一であるのは疑いが無いことである。

7．『木皿』＊pilate。アイヌ語pilate；エヴェンキ語のチャルバチ方言pilate，メルゲル方言pilati～pilat，ホイ方言pilat～pila，イミン方言pila。アイヌ語のpilateとエヴェンキ語pilateはほとんどすべて同じ音声構成をもっているが，アイヌ語におけるpilateは主として『厚い板で作られた木皿』を標示する。但し，エヴェンキ語諸方言のpilateは一般に『木や板や樹皮で作られたすべての木皿』を指しているのである。

8．『串』＊sakir。アイヌ語sakir；エヴェンキ語オルグヤ方言sakir，メ

ルゲル方言 sahir〜sahi，ドラル方言 sayir。エヴェンキ語諸方言に現われた実例から観察すると，オルグヤ方言の sakir という言い方は，アイヌ語の sakir と音声構造から完璧に一致している。しかし，エヴェンキ語 sakir の語中子音 k は，ある方言で h 及び y と変音された事実がみえるが，この形式の子音変音現象はアルタイ諸言語において，一般的音声変化規則と認められていることである。勿論，アイヌ語とエヴェンキ語の共有名詞における子音対応のシステムには，子音 k と h 及び y 間に発生した対応現象も一定数量で存在している。意味論上視野から分析すると，アイヌ語の sakir は，一般的に『魚を干すために竹や木で作られた，長さが1尺ぐらいになる串』を指すが，エヴェンキ語の sakir は主として『2尺ぐらい長くて細い木で作られ，先端に二つの股がある串』を示すのである。但し，この両言語では sakir と言う名詞を，すべて魚や野生動物及び家畜などの肉を干す場合に使用のである。

9．『木の切れ』＊ uyipuhen。アイヌ語 uype〜〜uypehe；エヴェンキ語で uyipuhen〜uyiphen〜uyiphe というが，ドラル方言では uyibhe とも言うことがある。アイヌ語の uypehe とエヴェンキ語の uyiphen の音声構成のうちには，エヴェンキ語語中の短母音 i と語尾の子音 n はアイヌ語のゼロ形式母音とゼロ形式子音との対応的な現象が見られる。これ以外の音声対応は，相互に一致している。アイヌ語やエヴェンキ語で uypehe〜uypehen は，すべて『木の細い切れ』を指す。ただし，アイヌ語のなかに『コツボ』等の意味を表す場合にも使われる以外，他人の子供に対して悪口をするときにも uypehe を使っていた。例えば，wenpe uype『貧乏人の子』，エヴェンキ語のうちに，この名詞はアイヌ語ほど広い意味をもっていない。ただ『木の切れ』という語義だけに限って使われているのである。

10．『垣』＊ kagin〜〜kaki。アイヌ語 kaki；エヴェンキ語オルグヤ方言 kagi，メルゲル方言 kaagi，イミン方言 haagi，ニェヘェ方言 hagi という。エヴェンキ語諸方言において，kagi アイヌ語の kaki と音声方面で割合に一致している。この共有名詞の音声対応には，アイヌ語語中子音 k

がエヴェンキ語語中子音 g の対応だけは異同的音声間の対応となる。但し, k と g の対応はこの両言語の子音対応システムにおいて, 一つの対応規則として認定された形式となる。意味論から考えると，アイヌ語の kaki は『冬季の北風を防止するために家を囲む垣』を指すが，エヴェンキ語で kagi は普通に『家や家畜圏を北風から防止するために細い柳で作った垣』を標示するのである。

11. 『毛皮の上着』,『外套』＊ uriki。アイヌ語 urihi，あるいは uriki～urki とも言う；エヴェンキ語のオルグヤ方言 uriki～urikin，メルゲル方言 uriki～urihi～urhin，ホイ方言 urihi～urhi。バインチャガン方言 urki～urhi～urhin。言うまでもなく，アイヌ語の uriki とエヴェンキ語の uriki は音声構造方面では何の曖昧も無くて完全に一致している。語義方面から考えると，アイヌ語で uriki は『犬や鹿の毛皮で作られた袖のないチョッキのようなもので，首から膝の下まで毛皮を内側にして作られ，冬の寒い時に着る毛皮服』を指すが，広義的には『毛皮の衣類』をすべて urihi とも言うことがある。しかし，エヴェンキ語において uriki は一般に『袖のない，毛皮の上着』の総称として用いられている。

12. 『鮭の皮靴』＊ cepkiri。アイヌ語 cepkiri；エヴェンキ語 cepkiri～cipkiri～cipkir。この中にアイヌ語の cepkiri とエヴェンキ語の cepkiri 無差異である同一音声構造で構成されたのである。語義方面からいうと，アイヌ語の cepkiri は主として『鮭の皮で作られた靴』を示すが，エヴェンキ語の cepkiri は『野生動物の皮で作られた靴』を指すのは普通である。昔は，エヴェンキ語において『魚の皮で作られた靴』をも cepkiri と表示していた。そのうえ，現在はエヴェンキ人の親族となるヘジェン人の諸方言でも『魚の皮で作られた靴』を cepki～sepku～sopku と呼ぶのである。

13. 『敷物』,『床』＊ sotki～＊ sötki。アイヌ語 sotki；エヴェンキ語オルグヤ方言 sötki～settki～sekti，ホイ方言 sötti～setter～setteg，メルゲル方言 sokti～sekte という。エヴェンキ語諸方言の sokti とアイヌ語 sotki と語中に，連続子音 kt と tk 対応が出現したのである。実を言う

と，アルタイ諸言語では，語中で現れた tk という連続的子音が，kt のように換位して発音される音声変化は，音声対応システムにおいてたびたび出て来るのである。これに関連して，エヴェンキ語の単なるオルグャ方言だけにも，語中における連続子音 t と k は tk 及び kt のように二つの発音形式を持っているのは紛れもないことである。なお，アイヌ語の sotki は『床』，『敷物』，『座』，『寝木』など意味内包を担って，幅広い場面に使用されるが，エヴェンキ語の sokti～sötki はただ『敷物』だけを標示するのである。

14. 『橇』＊ carase～～carage。アイヌ語 carase あるいは cerce；エヴェンキ語 carage～cerage～cirgae。アイヌ語の carase とエヴェンキ語の carage は音声構成において，非常に近づいているのは十分明確である。この共有名詞で現れたアイヌ語の子音 s とエヴェンキ語の子音 g との対応現象も，この両言語の音声対応システムに含める一つの法則として認識されたことになる。とは言え，アイヌ語の carase とエヴェンキ語の carage における音声構造方面に出現した一致点が圧倒的である。語義構成方面から分析すると，アイヌ語の carase は『橇』以外，またはすべての『すべり物』を表すこともできる。しかし，エヴェンキ語の carage は主に『橇』を指すのである。

15. 『刃物』，『刃』＊ notaku～＊ kotaku。アイヌ語 notaku～notak；エヴェンキ語 kotaku～kotak～hotag～hotar という。アイヌ語やエヴェンキ語の共有名詞 notaku と kotaku における，語頭子音 n と k の対応現象を除くほかは，全部一致した音声間に行った対応形式となるのである。語義方面から分析すると，アイヌ語の notaku は『刃』を指す場合が多いが，エヴェンキ語の kotaku は主として『刃物』を標示するのである。

16. 『針』＊ kime。アイヌ語 kim；エヴェンキ語 kime～hime～imme。アイヌ語の kim とエヴェンキ語 kime の音声対応における，ゼロ母音と短母音 e の対応は，前述した通りに一定数量で存在している。そのうえ，共有名詞 kim と kime はこの両言語では無差異である意味内包を現したことになるのである。

17.『泡』＊ kogosun～＊ kögösun。アイヌ語 koysun；エヴェンキ語メルゲル方言 kögösum～kösun，ドラル方言 köösöm～köösön，ホイ方言 köösön～höösöm～höösön～höösö。この共有名詞に見られた，音声対応形式は割合に複雑である。母音対応方面から観察すると，アイヌ語の語中短母音 o，u とゼロ母音はエヴェンキ語の短母音 ö 及び u と対応を行ったのである。子音対応方面では，アイヌ語の子音 k, y, s, n はエヴェンキ語の子音 k，g，s，n 対応している。この両言語における音声対応システムには，ö と o あるいは y と g のような特殊的音声対応現象がほかの共有語にもよく出現するのである。この共有名詞の音声構造形式である程度の相違が存在しているが，音声方面に現われた共有関係も明確に認定されていることになる。同時に，語義方面にも完全に一致しているのは疑いの無いことになるのである。

18.『頂上』＊ tapka～～dabga。アイヌ語 tapka；エヴェンキ語 dabga～dabgan。周知の通り，アイヌ語における子音構造システムの中に d，b，g などの子音音素が欠如しているので，アイヌ語とエヴェンキ語の共有語音声に対して，比較研究を行なう場合，子音 d と t，b と p，g と k 間の対応現象が法則として厳密に設定され，厳格に遵守されていることになる。だからこそ，この共有名詞にも，アイヌ語の子音 t，p，k はエヴェンキ語の d，b，g と音声対応カテゴリーに属する規則として整然かつ合理的に対応されたのである。意味論上に分析すると，アイヌ語の tapka とエヴェンキ語の dabga は，全く無差異に同じ意味を示したことである。

19.『湿地』＊ nitat～～nitar。アイヌ語 nitat；エヴェンキ語で一般的に nitar～nitag というが，ドラル方言では nicar あるいは nicag とも言う。アイヌ語の nitat 及びエヴェンキ語の nitar という共有名詞における，語尾子音 t と r 間の対応も一般的子音対応現象と認められている。実は，アルタイ諸言語の語尾でも子音 t と r などの対応関係が頻繁に出てくるのである。この共有名詞の語尾に現れた子音 t と r の対応を除くほかは，全部同じ音声間の対応形式に属するのである。語義方面でも，この両共有

名詞は完全に同じ意味を表している。

20. 『嵐の直前の陰気』＊ sursur。アイヌ語 sussur；エヴェンキ語 sursur〜sussur。言うまでもなく，アイヌ語の sussur とエヴェンキ語の sussur は音声構成方面において完全に一致しており，語義構造方面においても全く同じである。

21. 『霧雨』＊ kakur〜〜sagur。アイヌ語 kakur；エヴェンキ語 sagur，あるいは sagur という。アイヌ語の kakur とエヴェンキ語の sagur という共有名詞語頭では子音 k と s が対応し，語中では子音 k と l が対応した事実がある。このような対応現象はほかの共有語にも現われるのである。例えば，『乾燥不足』と『怒る』等の共有語をアイヌ語では kikin, ruska と言うが，エヴェンキ語では sikkin, susga と言うのである。共有名詞 kakur と sagur の音声対応において語頭子音 r と s の対応以外，他の音声対応現象は全部一致している。同時に語義構造方面でも同じ意味内包を担っているのである。

22. 『沼地』，『池地』＊ tosir〜＊ nosir。アイヌ語 tosir；エヴェンキ語 nosir。この共有名詞の音声対応形式に出現した語頭子音 t と n の対応は，ほかの共有語でも一定程度的に存在しているのである。例えば，『皮』という共有名詞はアイヌ語の中に tonto というが，エヴェンキ語では nondo または nonda〜nanda と発音されるのである。勿論，アイヌ語の tosir とエヴェンキ語の nosir は，語頭の異同的子音 t と n の対応以外，ほかの子音や母音間に出現した音声方面の対応はみな完全に一致している。意味論の方面から比較的に分析して見ると，アイヌ語の tosir は主に『川岸が川水の流れで丸くえぐられてがけ下のようになっているところ』を指すが，エヴェンキ語では nosir は一般に『超地』，『池地』を表すのである。

23. 『西』＊ apto〜〜abdo。アイヌ語 apto；エヴェンキ語 abto〜abdon。アイヌ語の apto とエヴェンキ語の abdo は母音対応においてすべてに一致しているが，子音対応方面では p と b 及び t と d のような異同的音声間の対応形式が発生したのである。しかしながら，子音 p と b，または

子音tとdの対応はこの両言語間によく見える子音対応現象である。と言うのは，アイヌ語の子音構造システムにはb，d，g等音声が非常に少ないからである。語義方面から比較的に分析すると，エヴェンキ語のabdonは『短時間にやや強く降る雨』を表すのは多いですが，アイヌ語のaptoは『雨』という自然現象の総称として使用されるのである。

24.『ふもと』＊poki～～boki。アイヌ語poki～pok；エヴェンキ語boki～bok，或いはpokir～bohirとも言う。この共有名詞の語頭でも，アイヌ語の子音pとエヴェンキ語の子音bの間に対応した事例が出てきたのである。但し，pokiとbokiにおいて音韻対応を全面に比較して見ると，語頭子音pとb以外の子音や母音間に発生した対応は，全部まったく相同的音声の中で行った音韻現象になる。語義方面から言えば，アイヌ語のpokiは『ふもと』という意味を示す以外，または『底』，『陰門』などを表す事がある。これに関して，エヴェンキ語のbokiも，アイヌ語のpokiと同じような意味内包を担っているのは非常に面白く感じられるのである。

25.『陽気』＊pa。アイヌ語pa；エヴェンキ語pa～paa。アイヌ語のpaとエヴェンキ語のpaは音声形式及び語義内容などの構造方面で，ほとんど完全に一致しているのは疑いの余地がないことである。

26.『大気』＊patun。アイヌ語patun；エヴェンキ語padunあるいはbudunという。アイヌ語のpatunとエヴェンキ語のpadun両共有名詞には，語頭，語尾子音及び語中母音などが，皆相互一致している音声間に対応現象を発生させたのである。しかし，アイヌ語の語中子音tは，エヴェンキ語の語中子音dの間に異同的音声の対応が行ったことになる。アイヌ語の子音tとエヴェンキ語の子音dの対応は，これ以外共用語の対応現象にも，一定程度に出てくるのである。意味論の方面から言うと，アイヌ語のpatunとエヴェンキ語のpadunは無差異に同じ意味を示していることになるのである。

27.『川』＊pet～～bera。アイヌ語pet；エヴェンキ語bera～bira～bir。このアイヌ語のpetとエヴェンキ語のbera両共有名詞では，子音pとb

及び子音ｔとｒの間に行った二つの子音対応現象は出現するが，勿論これら子音対応も上述のようにアイヌ語とエヴェンキ語の共有語範囲において，よく見える音声対応現象であるのです。その他に，エヴェンキ語語尾に位置する短母音ａは，アイヌ語語尾のゼル母音間に発生した対応形式も，一定数量を持つ語尾母音対応システムの一般的現象であろう。アイヌ語の pet とエヴェンキ語の bera は皆何の躊躇もなく『川』という意味内包を担っているのである。

28.『山』＊ huru。アイヌ語 huru～hur；エヴェンキ語 huru～uru～ur。アイヌ語とエヴェンキ語に現れた共有名詞 huru は，音声構造方面では全く同じですが，意味論の方面から比較的に研究したところ，アイヌ語の huru は主として『小山』或いは『山のだんだん高くなって行く斜面』を指すが，エヴェンキ語の huru はすべての『山』に関する一般的総称として使用されているのである。

29.『日差し』＊ sukus～～sugus。アイヌ語 sukus；エヴェンキ語ニェヘェ方言 sugus～sugun，その他の方言では sugun～sigun という言い方もある。この実例では，アイヌ語の sukus とエヴェンキ語の sugus の間に，語中子音ｋとｇのような，異同的音声の対応を除くほかは，全部一致している子音や母音間に対応形式を行ったのがはっきり見えるのである。そのうえ，アイヌ語の sukus 及びエヴェンキ語の sugus は意味論の方面でも，完全に相同的意味を標示しているのである。

30.『星』＊ nociw～～hosig。アイヌ語 nociw；エヴェンキ語では hosig～hosigta～hositta～osigta～ositta というようにそれぞれ発音される事実がある。エヴェンキ語のこれら言い方の中に hosig の音声構造は，アイヌ語の nociw 音声特徴と割合に一致している。とりわけ，母音間の対応が完全に相同であるのが明確に認識されることである。しかし，子音方面から現れた音声の関係を認定，配列して見ると，それはｎとｈ，ｃとｓ，ｗとｇの三つの子音対応現象に扱うことができるが，子音ｃとｓの対応及び子音ｗとｇの間に発生した対応形式は，この両言語において数多いの対応現象であり，子音ｎとｈの対応も他の共有語にはたびたび出て

くる音声の異同現象である。意味異論の方面により，全面的に分析してみると，アイヌ語のnociwとエヴェンキ語のhosigはすべての『星』を示した広義かつ総括的名詞になるのです。

31.『黴』＊kumi。アイヌ語kumi；エヴェンキ語ドラル方言kumi，メルゲル方言humi，ホイ方言umi～umin。或るエヴェンキ語の方言ではumとも言うことがある。エヴェンキ語語におけるkumiという言い方は，アイヌ語のkumiと音声構造及び意味内包等の方面から，全く疑問がない相同である。

32.『穂』＊pusihi。アイヌ語pusihiまたはpusという；エヴェンキ語pusihi，或いはusihiというのである。この両言語に現れたpusihiは音声方面ではすべて一致しているのが明確に認識される。語義構造方面では，ある程度的差異が存在しているのです。と言うのは，アイヌ語のpusihiが元来『ヒエの穂』を指していたが，その後『稲など穂』及び『植物の穂』を殆どすべて含めて表すようになったのである。しかしながら，エヴェンキ語の中で，初めからあらゆる一切の『植物の穂』を皆pusihiで標示していたが，今になると『糸や細長い紐と布の装飾品』をも含めて全部pusihiで示すようになったのである。

33.『茅』＊sunki。アイヌ語sunki；エヴェンキ語sunki，エヴェンキ語ホイ方言の中にはsungkiとも言う実例がある。言うまでも無く，アイヌ語のsunkiとエヴェンキ語のsunkiは音声構造範囲において完全に無差異である。しかし，意味論方面から言うと，アイヌ語のsunkiはただ『芦』だけの意味を指すが，エヴェンキ語におけるsunkiは『茅』という特定的植物を示す以外，または広義的場面には『雑草』をも表すことがある。

34.『草』＊ken。アイヌ語keni；エヴェンキ語keni，エヴェンキ語ドラル方言keeni，またはホイ方言heni～heeni～heena。アイヌ語のkeniと音声方面でほとんどすべて一致しているのは，エヴェンキ語のkeniという言い方であるのは疑いの余地がないことである。意味論上に分析すると，アイヌ語のkeniが『食用の野草』，『薬草』，『毒草』，『畑の雑草』，『野菜』等を含めた広い語義場面に使用されるが，エヴェンキ語のkeniは主とし

て『家畜の秣』と『秋の野草』及び『畑の雑草』等の意味内包を担っているのである。

35. 『麻』＊ kagi。アイヌ語 hay，或いは hayi；エヴェンキ語メルゲル方言 kagi，イミン方言 hayi，ドラル方言 hayi～ayi。勿論，エヴェンキ語の中には hayi というのが，音声形式からアイヌ語の hayi と無差異に一致している。それから，語義方面では，アイヌ語及びエヴェンキ語に現れた hayi が，皆主として『麻』を示す同時に，『麻のような植物』のような意味内包を表した場面にも用いられるのである。

36. 『野』＊ nupi～＊ nupi。アイヌ語 nup；エヴェンキ語 nubi～nobi～nowi。エヴェンキ語のこれら『野』に関する言葉において nubi という言い方は，アイヌ語 nup の音声構造特徴に一番近いのである。アイヌ語の nup とエヴェンキ語 nubi の中で，現れた異同的音声の対応現象とは，アイヌ語の語尾子音 p とエヴェンキ語の語尾音節に位にする子音 b の対応，またはエヴェンキ語の語尾短母音 i 及びアイヌ語のゼル母音との対応等であるが，これらはすべてこの両言語における音声対応規則の内容となっているのです。語義方面では，アイヌ語の nup は主に『山がない陸地の野や平原を表す』が，エヴェンキ語の nubi は『頂上が非常に低い山がある野及び平原をも示す』場合にも使用されるのである。

37. 『柳』＊ susu。アイヌ語 susu；エヴェンキ語 susu。この両言語で現れた名詞 susu は音声構造方面から無差異である。但し，意味論の方面では，アイヌ語の susu はほとんどすべて『柳の木』を表すが，エヴェンキ語の susu は元来一般に『春の緑柳』を標示していたけれども，現在は『竹』のことを susu で示すようになったのです。

38. 『崖』＊ pira～～kira。アイヌ語 pira；エヴェンキ語 kira または hira。アイヌ語の pira とエヴェンキ語の kira において，語頭子音 p と k の対応現象が他の実例にもたびたび出てくる音声の対応形式である。この共有名詞には，子音 p と k の対応を除くほかは全部一致している音声間に対応現象が発生したことになる。語義方面では，アイヌ語の pira がただ『崖』だけを表すが，エヴェンキ語の kira は『崖』以外または『頂上』の

ことをも指す場合がある。

39.『葉』＊hama〜〜nama。アイヌ語ham；エヴェンキ語nama。この実例に現れた語頭子音hとnの対応現象は，前述の内容に含める第14号共有名詞『刃』notak／kotak，及び第29号共有名詞『星』nosiw／hosig等の音声対応形式を討議する時，論述した通り，この両言語おける共有語では，子音nとh或いは子音nとk等の間に行った対応実例が基本的な規則として存在しているのである。これだからこそ，アイヌ語のhamとエヴェンキ語のnamaの音声対応の中に出現した，語頭子音hとnの対応形式に対して理解は容易である。それから，エヴェンキ語の語尾短母音aはアイヌ語のゼル母音との対応も，この前に述べたように音声の一般的対応形式に属する内容である。意味論の方面には，この両言語の共有名詞は勿論完全に同じ語義を持っていることになる。

40.『鳥』＊cikap〜＊cipaka。アイヌ語cikap；エヴェンキ語cipaka〜cipakan〜cipka。これら共有名詞に見られた通り，アイヌ語のcikapとエヴェンキ語のcipakaは，音声方面で割合に接近している。その中に，語頭子音cとcの対応，及び語頭音節の短母音iとi，または語中短母音aとaの対応が，皆同じ音声間に発生した対応現象である。但し，語中子音kとp，或いは語尾子音pと語尾音節子音k，または語尾短母音とゼル母音間などの対応は，すべて同じではない音声の対応現象となる。この共有名詞では，アイヌ語の子音kとpがエヴェンキ語の子音pとkの間に，現われた子音交替的対応形式は，アイヌ語とエヴェンキ語の共有語において，比較研究価値がある非常に重要な音声交替内容と思われる。実は，子音交替的対応はほかの共有語にもたびたび出てくる事もある。別に，アイヌ語のcikapとエヴェンキ語のcipakaは，語義方面からすべて無差異に『鳥』の総称として言葉の中に使用されている。

41.『オオカミ』＊gurken〜＊hurkew。アイヌ語horkew；エヴェンキ語ニェヘェ方言gurken〜gurke〜guske，メルゲル方言gurken〜gurge，ドラル方言gurke〜guske。音声方面でアイヌ語のhorkewと一番近づくのは，エヴェンキ語のgurkenという言い方にになるのである。この共

有名詞では，語中子音 r，k 及び短母音 e は，皆相同的な音声間に対応現象を行ったが，アイヌ語語頭子音 h，語尾子音 w 及び語頭音節の短母音 o 等は，エヴェンキ語の子音 g，n 及び短母音 u 等異同的音声間に対応したのである。これら対応には，語尾子音 w と n 対応形式や内容がかなり少数であるが，ほかの関連的対応現象はすべて，アイヌ語とエヴェンキ語の音声対応規則に属する項目になるのです。意味論の方面では，アイヌ語の horken とエヴェンキ語の gurken はまったく同じ意味で用いられているのである。

42.『キツネ』＊ sumari～～sulaki。アイヌ語 sumari；エヴェンキ語メルゲル方言 sulaki，バインチャガン方言 sulaki，ホイ方言 solaki～solah。アイヌ語の sumari とエヴェンキ語の sulaki は母音音素の構造方面からぴったり一致している。しかし，子音音素方面では，アイヌ語の子音 s と m 及び r 等が，それぞれエヴェンキ語の子音 s と l 及び k 等と対応したのである。この中，語尾部分に発生したアイヌ語の子音 r とエヴェンキ語の子音 k の対応が，共有語では一定数量に有するが，アイヌ語の子音 m とエヴェンキ語の子音 l の対応現象は出現率はかなり低いのである。そうも言え，アイヌ語とエヴェンキ語における共有語には，子音 m と l の対応現象がたびたび出てくることがある。例えば，『埋まる』，アイヌ語で omut と言い，エヴェンキ語で bolu-～bulut-という。なお，アイヌ語の sumari とエヴェンキ語の sulaki の間に語義方面の差異が全く存在しないのである。

43.『牛』＊ pekoi～＊ poko。アイヌ語 peko；エヴェンキ語オルグヤ方言 poko，メルゲル方言 boko，ホイ方言 boho～boh～buha。勿論，アイヌ語の peki 及びエヴェンキ語の poko において現れた短母音 e と o の対応現象は，共有語の音声対応範囲に相当高い出現率を持っている。短母音 e と o 以外の子音や母音の対応は全部同じ音声間に発生した内容である。意味論の方面から言うと，アイヌ語の peko は『牛』の総称として使用されるが，エヴェンキ語の poko は主に『公牛』，『肥えた牛』，『強い力を持つ牛』等の意味内包を担っているのである。

44.『魚』＊ mimahi～＊ nimahi。アイヌ語 mimihi～mimi，または mim という；エヴェンキ語 nimaki～nimake～nimaka～imaha 等と言う。アイヌ語の mimihi とエヴェンキ語の nimaki には，現れた語頭子音 m と n の対応形式がそれほど多くではないが，この以外の実例にも時として出てくることがある。例えば，『土間』と言う物をアイヌ語 mimihi と言い，エヴェンキ語で ninidar と発音する。その他，アイヌ語の mimihi とエヴェンキ語 nimaki の語尾音節や語中では，子音 h と k の対応，短母音 i と a の対応等見慣れた音声対応形式がある。語義方面から分析して見ると，アイヌ語の mimihi は主に『魚肉』，『魚の身』の意味で使用されるが，エヴェンキ語において nimahi は『魚』，『魚肉』，『魚の身』等を示すのである。

45.『魚の卵』＊ koma。アイヌ語 homa；エヴェンキ語 koma～homa。言うまでもなく，アイヌ語の homa とエヴェンキ語の homa は音声構成方面から完全に相同である。しかしながら，語義方面では，ある程度的差異が存在している。エヴェンキ語の中で homa は『魚の卵』を表すと同時に，『鶏の卵』を示す場合にも使用することがあるが，アイヌ語の koma は『すべての魚の卵』を標示する以外，また『ニシンの卵』や『かつの子』を表す時にも使われる。

46.『なめし皮』＊ tonto～～nando。アイヌ語で tonto；エヴェンキ語バインチャガン方言 nando，ホイ方言 nanda，ニェヘェ方言 nande。勿論アイヌ語の tonto と音声構成方面で一番近いのは，エヴェンキ語の nando という言い方である。tonto と nando の音声対応システムには，アイヌ語の語頭や語中に位置する子音 t が，エヴェンキ語の語頭子音 n 及び語中子音 d と対応し，アイヌ語の語中や語尾の短母音 o は，エヴェンキ語の語中短母音 a 及び語尾短母音 o と対応したことがある。このような音声対応は前述した実例でも現れたことがある。意味論上に比較研究して見ると，アイヌ語の tonto は『毛を抜いた皮』と『なめし皮』を指すのが普通であるが，エヴェンキ語の nando はアイヌ語の tonto 同じ意味内包を担う以外，または『毛を附けている皮』をも示す場合に使うことがある。

47.『胃袋』＊ kuttotta〜〜kodogda。アイヌ語 kuttotta；エヴェンキ語メルゲル方言 kuttotta，ドラル方言 kodogdo，イミン方言 hodogdo，ホイ方言 hodogdo〜hodood。音声構造では，アイヌ語の kuttotta とエヴェンキ語の kuttotta は非常に近ついているのです。この共有名詞の音声対応において，語頭子音 k と語中の連続子音 tt 及び短母音 u，o，a 等が，皆同じ音声間に行った対応現象となるのである。語義方面では，アイヌ語の kuttotta は特に『鳥の胃袋』を指すが，エヴェンキ語の kuttotta は『人間と動物の胃袋』を総合的に標示するのである。

48.『顔』＊ nan。アイヌ語 nan；エヴェンキ語 nan または nancin。エヴェンキ語ホイ言では，今『顔』を ancin〜nancin とも言う事がある。疑いの余地なし，アイヌ語の nan とエヴェンキ語の nan はただ音声方面だけにまったく一致していることではなくて，語義方面にも完全に相当である。

49.『あぶら』＊ sumihi。アイヌ語 sumihi；エヴェンキ語 sumihi または sumiji〜sumuji という。アイヌ語の sumihi はエヴェンキ語の sumihi と音声構造から完璧に一致しているが，意味論に関与する場面では，一定程度の差異が現れている。と言うのは，アイヌ語の sumihi は『油』及び『油脂』等語義を持ち，エヴェンキ語の sumihi は主として『動物脂肪』，とりわけ『動物の内臓に付く脂肪』を示すのである。

50.『陰茎』＊ ci。アイヌ語 ci；エヴェンキ語ドラル方言では cici，ホイ方言では sisi という。アイヌ語の ci とエヴェンキ語の cici は語義方面から無差別であるが，音声構成方面ではアイヌ語の ci が一つの音節で構成され，エヴェンキ語の cici は二つの音節で構成されたことになる。但し，エヴェンキ語のある方言では cici を単一音節形式 ci で使う実例もある。例えば，ci ooron『陰茎を使う』，『小便する』という言葉において ci『陰茎』は単一音節の形式で用いられたことになる。このような例を基いてよく考えて見ると，アイヌ語の ci とエヴェンキ語 cici または ci の間に音声方面でも，かなり重要的な共有関係が存在しているのは理の当然である。

51.『のど』＊ kuuttum～kögöm。アイヌ語 kuttom あるいは kuttomho；エヴェンキ語メルゲル方言 kögöm，ドラル方言 kööm，バインチャガン方言 högöm，ホイ方言 höömö という諸方言の発音がある。アイヌ語の kuttom とエヴェンキ語の kögöm は音声構造形式では一番近づくのである。この共有名詞には，アイヌ語の語中連続子音 tt とエヴェンキ語の単一子音 g と対応し，また短母音 u と ö が対応する等異同音声間の対応現象が現れる。実は，アイヌ語とエヴェンキ語の共有語において，連続子音と単一子音間に発生した対応はかなり多いです。この共有名詞は語義方面でも，完全に相同である。

52.『唾液』＊ nonini～＊ nonahi。アイヌ語 nonihi あるいは noni～non；エヴェンキ語 nonahi～nona～non。勿論，アイヌ語の nonihi はエヴェンキ語の nonahi と音声構造方面から最も近づいている。この共有名詞の音声対応には，語中短母音 i と a の対応だけが異同的音素間の対応形式となり，ほかの母音と子音の対応は殆どすべて相同である音素間に発生したことになる。意味論の方面から比較研究して見れば，アイヌ語の nonihi は『唾液』の総称として使われているが，エヴェンキ語の nonahi は一般的に子供達の『唾液』を示す時に用いられるのである。

53.『伯父さん』＊ aca～＊ aja。アイヌ語 aca；エヴェンキ語 aja。言うまでも無く，aca と aja の中で，アイヌ語の子音 c とエヴェンキ語の子音 j の対応が著しくなるが，これも両言語の子音対応範囲において，よく現れる音声対応現象である。意味論の方面から分析すると，アイヌ語の aca は『伯父さん』，『叔父さん』，『親族としてのおじ』，または『父母のいとこ』などの意味内包を担うが，エヴェンキ語の aja は一般に『両親の兄』だけを示す場合に使用するのである。

54.『人』＊ ku。アイヌ語 ku～kur；エヴェンキ語ドラル方言 ku，メルゲル方言 ku～kun。エヴェンキ語の中で kur と言えば『人々』の意味を示す。アイヌ語とエヴェンキ語に現れた『人』を指す ku という言い方は音声構造方面では，全く同じであるのは明確に認定されるのである。語義方面では，アイヌ語の ku は主に『見える人の形，影，姿を表す時に使わ

れる』[5] と解釈しているが，エヴェンキ語では ku を使用する場合，その人の形，影，姿が見えるか見えないのかとは完全に無関係に人を指すことができるのである。

55.『人人』＊ utar～～ular。アイヌ語 utar；エヴェンキ語 ular～olar～olor。勿論この共有名詞にはアイヌ語の utar 及びエヴェンキ語の ular は音声構造方面で比較的同一となり，その音声対応形式中で見えた通りに，語中異同的子音 t と l の対応以外，ほかの子音と母音の対応は皆同一音素間に行った対応現象となるのです。語義方面から言うと，ある程度の差異が存在しているのである。と言うのは，アイヌ語の utar は主として『人人』を指す同時に，人や動物や神を表す名詞後に付加されて『たち』という意味を示したゆえ，接尾辞の機能や役割を発揮することもある。意味論の方面から言うと，アイヌ語の utar は『動物の方にも使われる』[6] と解釈しているが，エヴェンキ語の ular はただ『人人』だけを表す機能や作用を持っているのである。

56.『女性』＊ matko。アイヌ語 matkor～mat；エヴェンキ語メルゲル方言 matko，ドラル方言 matko～matku～mathu，ニェヘェ方言 matho～mathu～matuhu，ホイ方言 motho～motoho。この共有名詞の内に現れたアイヌ語の matkor とエヴェンキ語の matkor は音声構造方面では完全に一致している。但し，語義方面ではアイヌ語の matkor は『女性』以外，『妻』という意味をも示すのである。これと関して，アイヌ語で mataki と言えば『妹』を指し，matkaci と言えば『十歳以前の少女』あるいは『大人らしくならない少女』等の意味を標示することがある。エヴェンキ語の matko は一応『大人らしくならない少女』または『十歳以前の少女』及び『普通の女性』等の意味内包を担うが，同時に女性を貶すかまたは苛めるか若しくは卑しめるか等の語義でもよく使用されるのである。

57.『子供』＊ nokan～＊ kokan。アイヌ語 nokan；エヴェンキ語オルグヤ方言 kokan，ニェヘェ方言 kohan～kogan，イミン方言 koha～hohakan。アイヌ語の nokan とエヴェンキ語の kokan の音声構造は非常に

近づいているのである。nokan と kokan の音声対応では，語頭の異同子音 n と k の対応現象以外は，皆同一音素間に行った対応形式となる。実は，子音 n と k 間の対応が，アイヌ語とエヴェンキ語の共有語における音声対応システムには，一例の法則として認められたことになる。この論文の中にも，ほかの共有名詞の音声対応を討議する時に現れたことがある。例えば，第14目の共有名詞『刃物』notaku／kotaku の音声対応では，子音 n と k の対応が現れている。それから，アイヌ語の nokan 及びエヴェンキ語 kokan の中に有する子音 k, n 及び短母音 o, a などの対応も見慣れた音声対応現象である。なお，アイヌ語の nokan とエヴェンキ語の kokan は，語義方面でも完全に無差異である。

58.『年』,『年齢』＊ pa～＊ ba。アイヌ語 pa；エヴェンキ語 ba～baa。アイヌ語の pa とエヴェンキ語の ba 間に出現した子音 p と b の対応は，前述した通りに，厳密かつ抽象的に構成された音声対応法則において重要的内容となるのである。勿論，これはアイヌ語の中に b という子音がなかったからである。意味論の方面により分析すると，アイヌ語の pa は『年』と『年齢』等意味内包を含めて表すが，エヴェンキ語の ba は主に『年齢』を示す。

59.『村』『町』＊ kutan。アイヌ語 kotan；エヴェンキ語オルグヤ方言 kutan～kotan，ドラル方言 kutan～koton，メルゲル方言 koto～hot。アイヌ語の kotan とエヴェンキ語の kotan は，音声構成方面では全く一致している。語義方面では，アイヌ語の kotan は『村』,『町』,『部落』,『集落』及び『人々の住む地域』等幅広い意味で使用される。エヴェンキ語の kotan も元来アイヌ語と同じように広義を持っていたが，今になると基本的に『多い人が集まって生活している町』だけを表すよになって移り変わったのである。

60.『さく』casi～＊ kasi。アイヌ語 casi～casa；エヴェンキ語 kasi～hasi。アイヌ語の casi とエヴェンキ語の kasi は，語頭における異同子音 c と k の対応以外すべて，同じ音素間に発生した対応現象になるのである。子音 c と k の対応はアイヌ語とエヴェンキ語の共有名詞には，た

びたび出てくる音声対応現象である。意味論の方面から見ると，アイヌ語の casi は『さく』という意味を示す以外，または『中庭』等の語義を指すことがある。しかし，エヴェンキ語では，kasi は『さく』，『入り口の部屋』，『下屋』等の意味を表すことになる。

61. 『場所』＊ oro。アイヌ語 oro；エヴェンキ語 oro～oron。アイヌ語とエヴェンキ語の共有名詞 oro は，完全に相同的音素で構成されたのである。語義方面では，アイヌ語の oro は『場所』，『所』，『中』等意味を表すのに，エヴェンキ語の oro は『場所』，『山の所』，『床』等意味を標示するのである。

62. 『仲間』＊ tumta～＊ dumda。アイヌ語 tumta；エヴェンキ語 dumda。共有名詞 tumta と dumda の内には，アイヌ語の子音 t とエヴェンキ語の子音 d 間の対応が現れる。これも前述した通り，アイヌ語の子音構造システムにおいて d という音素がないので，d や t の場合すべて子音 t が使われる。だからこそ，エヴェンキ語の子音 d がアイヌ語の子音 t との対応する現象がかなり多いと言えよ。この共有名詞には，子音 t と d の対応を除くほかは，全部同一音素間に発生した対応現象となる。そのうえ，アイヌ語の tumta とエヴェンキ語の dumda は，語義方面でも，相当的に一致している。

63. 『昔』＊ teeta～＊ diida。アイヌ語 teeta；エヴェンキ語 diida～diide。アイヌ語の teeta 及びエヴェンキ語 diida の音声対応では，アイヌ語の長母音 ee とエヴェンキ語の長母音 ii と対応したことがある。このような母音対応は，両言語の共有語において，出現率が割合に低いのである。共有名詞 teeta と diida では，現れた子音 t と d の対応，及び短母音 a と a の対応等は，すべて一般的対応現象に属する。それから，語義方面でも，無差異で一致しているのである。

64. 『戦争』＊ tumi～＊ tumir。アイヌ語 tumi；エヴェンキ語 tumir あるいは tuumir。これも前述した通り，語尾でエヴェンキ語の子音はアイヌ語のゼロ子音との対応が，一つの自然に規定された対応法則となるのである。この共有語にも，エヴェンキ語の語尾子音 r はアイヌ語の語尾ゼロ

子音と対応したが，その以外の音声対応は皆同じ音素間に行ったことになる。意味論の方面から考えでも，アイヌ語のtumiとエヴェンキ語のtumirは，語義上差異が存在していないことである。

65.『踏舞』＊tapkar～＊tepker。アイヌ語tapker；エヴェンキ語depker～dekker。アイヌ語のtapkarとエヴェンキ語depkerの中に，語頭異同子音tとdの対応や語頭音節の短母音aとeの対応形式以外，ほかの子音や母音間の対応が全部一致しているのである。意味構造の方面から分析して見ると，一般にはアイヌ語のtapkarとエヴェンキ語のdepkerはすべて『人々が手の平を上向け，両腕を広げて斜め前上にがざし，一歩一歩足を踏むしめて進む踊り』を示すが，アイヌ語のtapkarは主として男性だけが舞うことを指し，エヴェンキ語のdepkerは男性と女性が一緒に舞うことを標示するのである。

四

アイヌ語とエヴェンキ語において，以上論述した共有名詞のように，音声対応構造方面で整然かつ規範であり，語義構造方面にも完全に相同であるか，またはかなり一致している共有語がある。この論文では65の共有名詞を選び出して，音声学と語義学の方面から，共有的音声関係及び語義関係を具体的に比較研究したのである。

この論文で言及しなかった共有名詞も一定程度に残されている。アイヌ語とエヴェンキ語における共有名詞を全部一つ一つに認定，配列，分析する事を遠慮した原因は，ある共有名詞の音声対応現象が余りにも規範ではないか，あるいは意味構造方面で割合に大きい差異が存在するか，または相当複雑的音声や語義及び語源関係を持つか，など難解的問題があるからこそである。明確に指摘すれば，アイヌ語とエヴェンキ語において，音声論及び意味論の方面から更に一層分析，研究価値がある共有名詞はまだ相当数量に存在している。しかし，それら共有名詞をこの論文に入れて論述すると，長い篇幅を占めるうえ，論述の形式や内容も上述の共有名詞より

遥かに複雑になるので，ここで討論を展開する煩雑的問題から避けたことになる。

例えば，『もも』をアイヌ語で om～omimi と言い，エヴェンキ語で og～ogon という；『傷』をアイヌ語で pirihi と言い，エヴェンキ語で ciragan～ciraka～sirak という；『小馬』をアイヌ語で coni と言い，エヴェンキ語で nonakan～onaka という；『夜』をアイヌ語で kume と言い，エヴェンキ語で hun～sun という；『角』をアイヌ語で sikkew と言い，エヴェンキ語で iiggi という；『葉』をアイヌ語で ra と言い，エヴェンキ語で lawa～nawa というなど一定数量の共有名詞がある。これら共有名詞の音声対応規則はかなり複雑うえ，まだ相当煩雑的変音規則が含めているので，言語学の一般的比較研究の立場から討議を展開するのは，それほど簡単な事ではないと思われる。

なお，アイヌ語とエヴェンキ語の共有名詞には，音声構成方面から一定程度の共有関係を有するが，語義方面にはかなり深くて込み入った差異が存在している実例もある。但し，このような共有名詞を音韻論構造学方面から，十分規範的に配列して比較研究を進行するのは，そんなに容易である事ではないのである。例えば，アイヌ語においてすべての『花』を nonno というが，エヴェンキ語では『春季の山に生える赤い色の花』を nanna という；アイヌ語の tak は『かたまり』を指すが，エヴェンキ語の taka は『小さくて硬い物』や『馬や牛の蹄』あるいは『すべての硬いもの』を表す；アイヌ語の tope は『乳房』及び『汁』等を示すが，エヴェンキ語の tomi はただ『乳頭』だけを標示する；アイヌ語の ure～urehe は『足首から先の部分』を指すが，エヴェンキ語の kulahe～hulahe～ulahe～ulihi は『足の裏面』を表すのである。以上のような音声方面では，一定程度に存する共有関係が明確に認定されている上に，語義方面でも十分注意すべきである奥深い意味的関与を持つ共有名詞はあるが，その語義の因縁と奥深い意味内包の構造を詳細かつ妥当的に把握しなければ，それをも簡単に比べて分析研究して，意味構造方面に関する共有関係を精確かつ完璧に解釈して論述することが割合に困難である。

要するに，アイヌ語とエヴェンキ語の間にかなり数量の共有語があり，それは名詞だけの範囲に存在していることではなくて，代名詞，形容詞，数詞，動詞及び助詞，副詞等語彙方面でも，さまざまな共有語はそれぞれの場面に異同的程度で現れているのである。実は，アイヌ語とエヴェンキ語に関与する共有関係は語彙方面しか出現することではなく，形態論に属する幅広い文法学方面でも，相当的研究価値がある共有関係があるのは疑いの余地がないことである。本人も『アイヌ語とアルタイ諸言語の各形態研究』という論文を『民族語文』の1997年第4号P 64-68で公刊したことがある。

アイヌ語とエヴェンキ語において，具体的に存在している数多い共有成分を一つ一つに選定，配列したうえ，その資料を系統かつ全面的に分析研究して，最後にすべての研究結果を基づい，この両言語の事実に符合する科学的結論を出すことができると思われる。歴史資料から見ると，エヴェンキ人の祖先，または満州ツングース諸民族の祖先が，中国の長白山と朝鮮半島，日本海及び日本海周辺の各地域で生活をして，非常に活躍かつ頻繁に活動していたのである。これだからこそ，エヴェンキ人を含める満州ツングース諸民族は，日本諸島に生活していたアイヌ人と何か歴史的繋がりがあり，歴史上さまざまな十分珍しい共有遺産を残したと感じられる。長い歴史の中で共有遺産として残された物の一部分は，生きている化石と言われた言語で現れた共有成分である。とは言え，アイヌ語とエヴェンキ語に現れた共有成分の由来を，すべてそのまま明確に論述するのはそれほど簡単ではないのである。とりわけ，この一篇論文では，そんな長い歴史の流しを経て残された複雑かつ奥深い学術問題に対して，最後までの結論を提出することができないのは理解の容易ことである。しかしながら，アイヌ語とエヴェンキ語の共有関係に関する研究をまだ続けて行うつもりである。最後の結論を最後の研究結果と共に自然に現れると設定しているところである。

注

[1] 例えば，多種言語成分で構成された混合語からそれぞれの言語成分を取り出すと，この混合語がすぐに消滅される。混合語は国と地域により民族言語として使用されていることもある。

[2] ジョン・バチラー：『アイヌ・英・和辞典』第4版，P.306，岩波書店1981年。

[3] 田村すず子：『アイヌ語沙流方言辞典』P.210，草風館1995年。

[4] 同3 P.195

[5] 同3 P.364

[6] 同3 P.792

参考資料：

知里真志保：『アイヌ語分類辞典』（植物篇）日本常民文化研究所，1953年。
『アイヌ語分類辞典』（人間篇）日本常民文化研究所，1953年。
『アイヌ語分類辞典』（動物篇）日本常民文化研究所，1962年。
『地名アイヌ語小辞典』にれ書房1956年。

服部四郎ほか共編：『アイヌ語方言辞典』岩波書店1964年。

山田　秀三：『北海道地名』北海道新聞社1984年。

田村すず子：『アイヌ音声資料―韻文篇―』早稲田大学語学教育研究所1996年。

田村すず子：『アイヌ語沙流方言辞典』草風館1995年。

中川　　裕：『アイヌ語千歳方言辞典』草風館1995年。

萱野　　茂：『萱野茂のアイヌ語方言辞典』三省堂1996年。

ジョン・バチラー：『アイヌ・英・和辞典』第4版，岩波書店1981年。

村崎　恭子：『アイヌ語樺太方言』（文法篇）国書刊行会1979年。

道　尔　吉：『エヴェンキ語漢語辞典』内モンゴル文化出版社1998年。

涂　吉　昌：『エヴェンキ語漢語対照語彙辞典』黒龍江省エヴェンキ語研究会1999年。

朝　　克：『エヴェンキ語研究』北京民族出版社1995年。

朝　　克：『エヴェンキ語三方言対照基礎語彙集』小樽商科大学言語センター1997年。

朝　　克：『中国ツングス－諸語対照基礎語彙集』小樽商科大学言語センター1995年。

朝　　克：『エヴェンキ語基礎語彙集』東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所1991年。

朝克ほか編：『ソロン語基本例文集』北海道大学文学部 1991年。
朝　　克：『エヴェンキ語音声資料』中国社会科学院民族研究所 1994年。